

5・30「路上会合」 集会アピール

普天間基地の「移設先さがし」という、現政権がこの半年間続けてきた「不毛なゲーム」が、前政権と同じく名護市辺野古「移設」案という形で、政治的に「決着」をつけられようとしています。そのことに対する、沖縄の人々の拒否や憤りの念は、今や、沸点に達しつつあります。

沖縄の人々の意思に反する米軍基地の押しつけによって、人間の存在の根底にまで及ぶ過酷な暴力や「人間破壊」にさらされ続けてきた、沖縄の「軍事植民地」的な状況を、今後も永久に日本（ヤマト）は沖縄に強制し続けるのか。「もうこれ以上、基地を押しつけるな！今すぐ基地をどける！」と叫ぶ沖縄の〈声〉は、まさにそのことを、日本（ヤマト）の私たちに問いかけています。

この数年、この国の各都市の街頭では「生の無条件の肯定」を掲げる、「保障されざる者たち」の運動が活発に展開されてきました。それが、「基地にさらされる生」からの解放を求める沖縄の〈声〉と、どのように出会い、交差しあえるのか。そのような、「基地にさらされる生」からの解放までも含みこむものとして、軍事力による「国家安全保障」を根底から否定する「民衆の安全保障」の核として、「生の無条件の肯定」を私たちは豊かに花開かせることができるのか。今、そのことが私たちに問われているように思います。

在日米軍による平和維持・「抑止力」という「日米安保 50 年の嘘」からの決別を進めたい。そこから更に、私たちを大きな生きがたさに追いやり、容赦なく見捨てるこの国の政治のあり方を私たち自身の手で壊し、組み立てなおしたい。そのように、この国の長年に及ぶ支配・統治システムに「亀裂」・「切断」をもたらすことに向けて、富山の街頭で自らの〈声〉をあげることで、私・たちは、「基地をどける！」と叫ぶ沖縄の〈声〉と呼びかけあいたい。

私・たちは、今後も、沖縄の〈声〉と呼びかけあいながら、「いくつもの日本」へ向けた「いくつもの民」による「日本の構成的解体（くみたてなおし）」の営みに根ざす〈声〉を、街頭で響かせあいたいと思います。

2010・5・30

「路上会合：沖縄の〈声〉と呼びかけあうことを日本の^{くみたてなおし}構成的解体の始まりに！」

参加者一同